



「フレレンズ連絡会」

地域の新たな支え合い実現へ向けた、小さな実験

さわやか福祉財団 ネットワーク育成支援プロジェクトリーダー 安部 博

「いろいろ考えたのですけれど、介護保険事業から撤退して、ふれあい活動（当財団の推奨するボランティア活動）に戻ろうと思うのです。そのきっかけとしてフレレンズ連絡会（以下フレレンズ）が使えるような気がして…」

「フレレンズ」とは、インストラクターが事務局となって地域で取り組む自主事業で、当財団ネットワ

ーク育成支援事業の愛称です。地域包括支援センター（以下「包括」）をはじめとした、地域の関係団体や有志が集い、フォーマルとインフォーマルのサービスのあり方を考え、その実現に挑戦する地域ネットワークのこと。

昨年5つの地域で試験実施してきましたが、参加者の肩書を問わない連絡会には、自治体や「包括」

のメンバーが次々に参加、活発な情報交換や、地域住民と協働した新たな動きが始まっています。そのフレレンズ事業に、今年は23名のインストラクターが手を挙げました。冒頭の言葉は、その中の数人が語ったものです。

フレレンズの特徴は、要約すると以下の通りです。

■「包括」をぜひメンバーに（地

域全体の情報や、事例がここに集まっています。地域の概念は団体によってさまざまですが、ここはひとつ「包括」の所管エリアを地域と仮定して議論してみませんか）

■課題はフレレンズが決める（地域のことは地域の方々が一番よく知っています）

■活動の表現方法も自由（テーマによってその発信の仕方も異なるでしょう）

■皆さんは知恵と汗を（財団はお金出すけど口出さない）

■3年計画でじっくりと、地域の役に立つ具体的なかたちを創出しましょう

一方で、あるインストラクターは「私は行政を信用していない。彼らとの連携を前提としたフレン

ズは見合わせたい」と言います。過去に行政との折衝で苦い経験があったのかもしれませんが、しかし今や行政も大きく変わろうとしています。表面的には変化の見えない市や町でも、動き出すキッカケを必死で探している、そんな印象を強く持ちます。

私たちが目指すふれあい社会は、行政も含めたチームが互いに協力して、地域にネットワークを広げつつ、地域が求めるサービスを創出し、補完することから実現できるのではないのでしょうか。

堀田理事長は、最近もある基調講演でこう述べています。「認知症は神様からの贈り物だ」。贈り

物は英語で「GIFT（ギフト）」です。ギフトの中には「IF」という言葉があります。これは、認知症

にとどまらず、支援を必要とする様々な人々が抱く苦しみや悲しみ、不安感や絶望感と読み替えてもいいかもしれません。しかし、このIFを両側から包んでいるのがGとT。Gを行政、Tを地域（住民）と考えてみたらどうでしょう。たとえていえば、今までの支え合いは、細い棒が林立して地域を支えるイメージです。新たな支え合いは、行政と「包括」という太い柱を軸に、住民のネットワークが、その柱をさらに強固に支えるという姿です。フレレンズがそんな土台を固める小さな役割を担えたら幸いです。

